

目 次

序章 「地方女子」は「呪縛」なのか？

1 地域の影響力

2 「地方」とは？

3 性別の影響力

4 「女の子」だから四年制大学へ行かなくても」は都市伝説か？

5 「自己責任」を解除するために

第1章 「地方」からみた大学進学

1 選抜としての大学進学

「能力」を選抜する

「能力」としての学歴

2 どの高校へ通っているか

高校のトラッキング

非都市部の高校における進路

3 保護者の教育方針

大卒家庭の方針

高卒家庭の方針

「大学」を過剰に求める大卒家庭

4 大学進学先を自由に選んでいるわけではない

地域によって進学先が偏る

先達が拓いた道をたどる

5 「地方」で一括りにできない大学進学

大学へ進学した「大人」は身近な存在か

県内なら通学できる？

6 「地方」は大学進学が前提ではない

第2章 どのように「女の子」になるのか

1 性別がつきまとう社会

2 ジェンダーとは？

3 「男女の差」とは何か？

4 ジェンダーを作っていく学校

家庭から学校へ

性別を獲得するトレーニングの日々

至る所に顔を出す性別カテゴリー

知らぬ間に学ぶジェンダー

5 子どもたちが生み出すジェンダー

マウントする男子たち？ ドロドロする女子たち？

主導権は誰の手に？

6 ジェンダーから逃れられない社会

第3章 理系から遠ざけられる女子たち

1 女子は理数科目が苦手なのか？

理数科目の学力に男女差はほほない

周囲の大人たちがつジェンダー・ステレオタイプ

2 「理系は男子」というジェンダーの影響力

理数科目に苦手意識をもつ女子たち

「理系ではない」と思っている女子たち

文理意識と進路選択

3 理数科目から女子を遠ざける学校

性別カテゴリーの影響

理数科目と教師

実験から遠ざけられる女子たち

4 女子をエンパワメントする

第4章 女子はなぜ四年制大学へ進学しにくいのか？

1 大学進学 of 経済的合理性が男女で異なる

無視できない進学費用

男女で異なる大学進学 of 経済的利点

高卒後の進路選択が限られている

2 進学期待と進学希望

3 「県外」というハードル

「親心」という善意

居住地の労働条件

行動的な女子たち

4 学業成績だけではない女子特有の進路

「受け皿」だった女子大・短大

学力だけで説明できない女子の進路

「難関大学」を回避する／させられる女子たち

複数の条件を考慮する進路選択

5 「手に職」という進路をなぜ選択するのか？

短大・専門学校存在感

進路選択で何を重視するのか？

将来の夢・職業とジェンダー

短大・専門学校が「合理的」となってしまう

6 「大学進学が前提」という男子のプレッシャー

「上昇」を求められる男子たち

男子たちが抱えるプレッシャー

7 女子たちが纏う「空気」の難しさ

「空気」だからこそ気づかない

居心地が良い「空気」とは？

終章 「地方女子」を呪縛にしないために

1 個人や家族に責任を押し付けない

2 拙速な教育費無償化には反対

3 〳無償化〴の落とし穴

4 新たな自己責任の誕生？

5 誰もが学べる社会を実現する

6 いまここの暮らしを保障する

7 「呪縛」を紐解いた先へ

あとがき

185

主要参考文献一覧

196

序章 「地方女子」は「呪縛」なのか？

「地方女子の呪縛」と聞いてどんなことをイメージするだろうか？「地方」で暮らすことに「生きづらさ」を感じ、故郷を飛び出した女性にとって、「地方女子」はまさに「呪縛」だったかもしれない。反対に、「居心地の良さ」を感じて楽しく暮らしている女性からすれば、「呪縛」と表現されることに強い反感を覚えるかもしれない。「地方」で暮らす男性の方が、「地方男子は呪縛だ」と思っているかもしれない。もしかすると大都市圏に暮らす人たちが、「地方女子」に対する「呪縛」イメージをもっているかもしれない。もし期待されていたなら申し訳ないため、あらかじめ断っておくと、本書は「地方で暮らすこと」と「生きづらさ」や「呪縛」を直接結びつけることはしないし、「誰が最も生きづらいか」といった比較もしない。というよりも、筆者の立場から「地方で暮らすこと」の評価や、「誰が生きづらいか」を判断することなど、できるはずもないし、したくもない。

本書は、「地方女子」が「呪縛」になってしまいかねない社会とは何か、を問うもので

ある。結論から述べるならば、大学へ進学するために「個人の努力」がことさらに強調され、「大学進学しなければならぬ」という考えが蔓延まんえんした社会において、「地方女子」が「呪縛」になってしまいかねないことを本書では説明していく。

どこで生まれ育ったのか、保護者が大学へ通っていたか、性別はどちらか、こういった高校へ進学したか。筆者が専門とする教育社会学という分野では、大学進学のプロセスにおいて、こうした社会的条件や属性が個人の努力を蝕むしばんだり、促進したり、方向づけたりしていることを明らかにしてきた。

「いやいや、私は自分の意志で大学進学を決めたし、そのために勉強を頑張った」と反論する読者もいるだろう。もちろん、そうした「選択」や「努力」は事実であり、そのこと自体を否定するつもりはない。どの高校へ進学するか、理系文系どちらにするか、大学へ進学するかどうかなど、教育では多くの「選択」を行うが、これら全てを「他人に選択させられた」人は稀まれだろうし、他人に言われて「努力」できれば苦労しない。

しかし、大学進学へ向けた「選択」や「努力」の背後には、保護者を含めた周囲からの働きかけ、同級生や友人の存在、選択肢の数、仕事や生活と性別の関係などが影響してお

り、社会から完全に自由で独立した「選択」や「努力」は難しいのである。そして、大学進学においてその「選択」や「努力」が最も難しくなりやすいのが、「地方女子」である。

1 地域の影響力

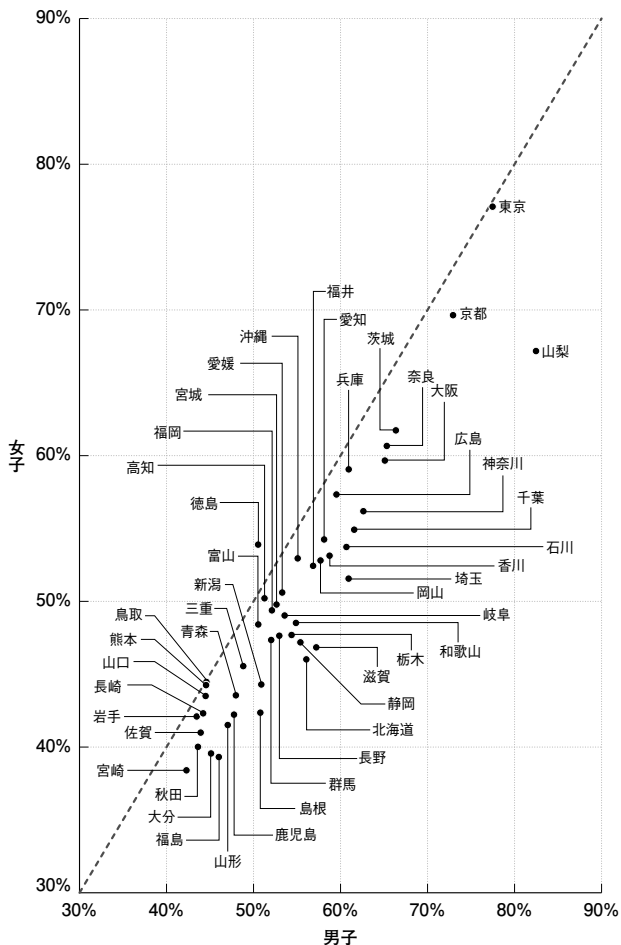
一つの証左として、四年制大学（以下、大学）進学率から社会の影響力を考えてみよう。

図1は2024年度の大学進学率を都道府県ごとに男女別で示したものである。^{*1}

まず目につくのが地域間の差だろう。東京は男女とも75%以上の進学率だが、男女とも40%前後の都道府県もある。首都圏や京阪神のような大都市圏に住む女子と比較すれば、東北や九州の男子は大学進学率が10ポイント以上低い。

この図をみて、「東京や京都、山梨にいる高校生は、東北や九州の高校生よりも努力してきたに違いない」と結論づけるよりも、「大都市圏ほど大学が多いのではないか?」「東京や京都と比べて東北や九州は世帯収入が低いのではないか?」など、他の要因を考えた読者の方が多いだろう。仮に同じような「努力」をしたとしても、生まれ育った地域によ

図1 都道府県別・男女別の四年制大学進学率



って大学進学の手ドルが異なる可能性がある。特に大都市圏以外の地域、いわゆる「地方」で手ドルが高くなるように思われる。

2 「地方」とは？

本書で指す「地方」について簡単に整理したい。図1からわかるように、大学進学率は大都市圏と非大都市圏で二分されているわけではない。国立教育政策研究所の報告書『18歳人口減少期的高等教育進学需要に関する研究』では、非大都市圏の中でも二つのパターンが示されている。^{*2}

一つは、大学・学部が集積した道県（北海道、宮城、石川、岡山、広島、福岡）とそれ以外の県という分類である。図1をみても、前者の道県は大学進学率が比較的高い。もう一つは、大都市圏からの距離で分類し、北関東・北陸・甲信越・東海・東近畿・中国・四国と、北海道・東北・九州・沖縄という区分である。

いずれの方法で分類しても、宮城と福岡を除く東北・九州地方の大学進学率が低いため、

本書では大学進学において「壁」が高いと考えられる東北・九州地方を「地方」と呼ぶこととする。

3 性別の影響力

男女差も無視できない。図1の対角線は、男女の大学進学率が1・1であることを示しており、点線より上に位置する場合はその都道府県の女子の大学進学率が男子を上回っていることになる。反対に、下に位置する場合は女子より男子の大学進学率が上回っている。点線から距離があるほど、男女差が大きい。

仮に「性別」が大学進学と関係ないのであれば、点線の上下近くに散らばって都道府県が位置するはずだが、残念ながら徳島以外の46都道府県で男子の大学進学率が高い^{*3}。繰り返しになるが、この図から「女子より男子の方が努力している」と結論づける人はほとんどいないだろう。

国際教育政策が専門の畠山勝太によると、諸外国では女性の方が大学へ進学する傾向に